

普通科人文社会科学32班

幸福感が得られる共通の行動

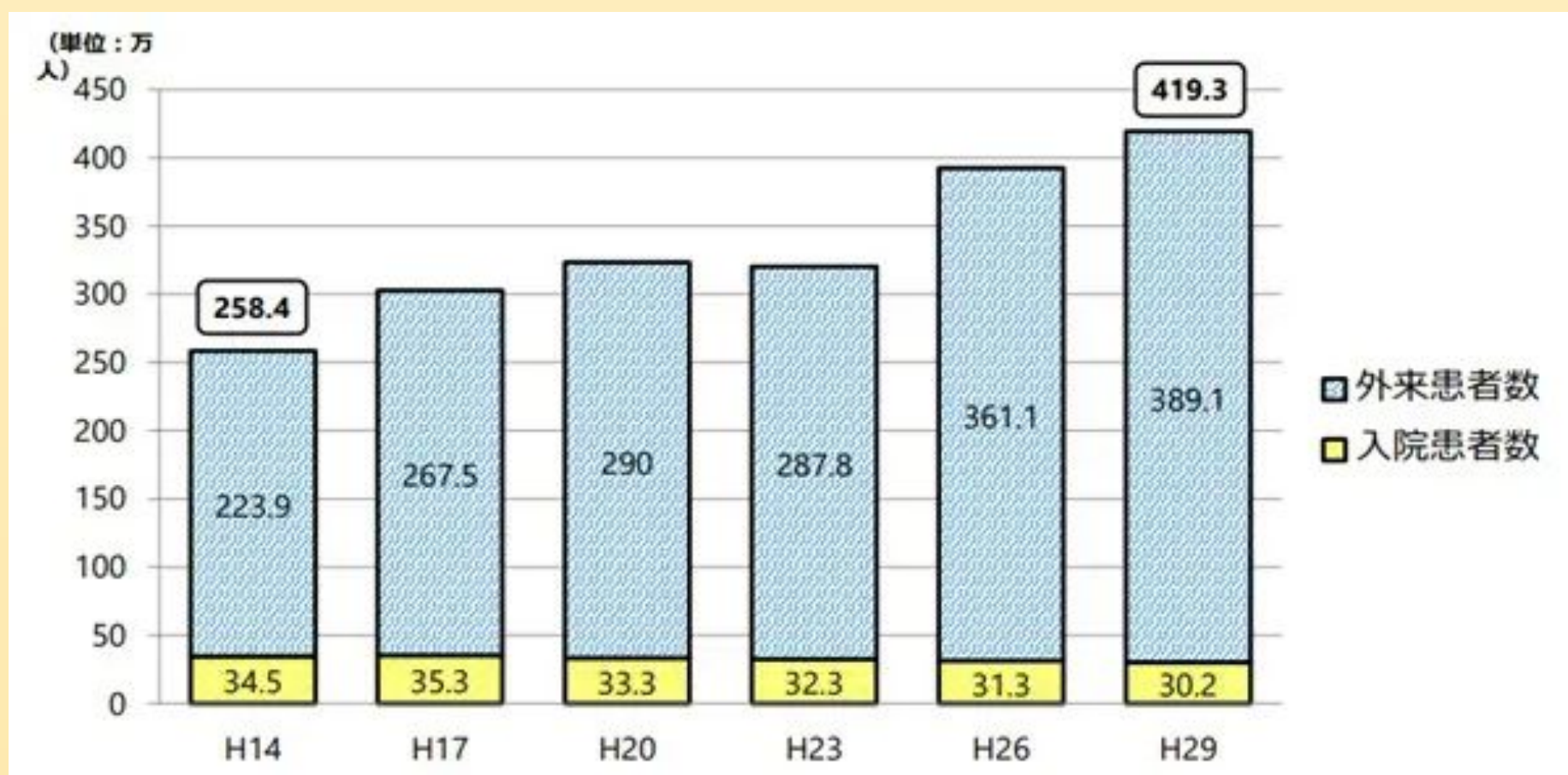
班員 栗原裕二郎 川原裕紀
寺田いずみ 田代結萌

指導者 大西 圭先生

研究の動機

ターゲット: 学生

精神疾患の患者数が増加している状況を改善したいと考えたから。



必要な道具

パソコン(タブレット)

仮説

幸福感が得られる行動の共通点は、体温が上昇する行動ではないか？それを別のことに取り入れることで学生の幸福感を増し精神疾患の患者数を減らせるのではないか？



研究の目的

幸福感が得られる共通の行動を見つける。

先行研究

ある特定の行動や習慣と幸福度との間に有意な相関がある。

<相関係数のデータ>

喫煙習慣 -0.122 募金・寄付 0.078

席を譲る 0.065 ギャンブル 0.000

研究計画

春休み期間は計画の見直し準備

4～5月	アンケートの実施
6～7月	集計・結果
夏休み	考察
9～10月	意見をいただく
11～12月	ポスターまとめ

研究方法

アンケートの実施

Q1、あなたの幸せだと感じる瞬間は？

Q2、1はどのようなときにする行動ですか？
(いつ、どこで、その時の周囲の環境、その時の感情、その他など)

→Q2から仮説が正しいか、または別に共通点があるのか考える。

その考えをスクールカウンセラーや専門家の方々に聞いていただき、精神疾患との関係についての意見をいただく。

参考文献

名古屋学院大学論集 社会科学篇

49巻 3号 行動や習慣が主観的幸福度に与える影響

<https://core.ac.uk/download/pdf/51457705.pdf>